

「新型インフルエンザと季節性インフルエンザのダブルパンチ」

米国では9月以降、急速にインフルエンザ患者数が増加し、現在、すでに通年のピークを上回っていますが、ほとんどが、新型インフルエンザとみられています。今後は、通年どおり、季節性インフルエンザも増加するでしょう。

新型インフルエンザが、通常の季節性インフルエンザと異なるのは、青少年の重症例が多いことです。そのため、新型インフルエンザの場合、50歳以上の人よりも25歳未満の人が優先的に予防接種の対象となります。米国疾病予防管理センター（CDC）は、すでに新型と季節性インフルエンザのワクチン対象者について言及していますが、表1のとおりです。

表1：新型と季節性インフルエンザの予防接種対象者	
新型・季節性インフルエンザのワクチンを両方受けたほうがよい人	<ul style="list-style-type: none">・ 妊婦・ 生後6か月未満の乳児がいる家庭の人全員・ 医療従事者・ 生後6か月以上19歳未満の人・ 65歳未満で、インフルエンザにかかると重症化する恐れのある人（心不全や喘息などの心肺疾患、糖尿病などの代謝疾患、HIVや化学療法などの免疫抑制状態、認知症や痙攣などの誤嚥ハイリスク群）
新型インフルエンザのワクチンを受けたほうがよい人	<ul style="list-style-type: none">・ 19歳以上25歳未満の人
季節性インフルエンザのワクチンを受けたほうがよい人	<ul style="list-style-type: none">・ 50歳以上の人・ 老人ホームなどの長期療養施設に住む人

問題は、新型インフルエンザのワクチンが全国的に不足していることです。そのため、どの医療施設も、厳しく優先順を決めています。ただし、昨年、メキシコで新型インフルエンザが初めて発見されたときは、その重症性が非常に懸念されましたが、幸いそこまでは至っていません。要は、パニックに陥らず、かかりつけ医にインフルエンザ・ワクチンの備蓄について定期的に確認し、自分の順番が回ってきたら、迅速に受けることです。

現在、新型も季節性インフルエンザも注射型と点鼻型のワクチンがありますが、点鼻型は、新型・季節性に関係なく、2歳から49歳の健康な妊娠していない人のみが対象となります。新型と季節性ワクチンの点鼻型を同時に受けることはできませんが、2つの注射型、あるいは、一方は注射型で他方は点鼻型の場合は、同時に受け

ることができます。通常は1回ずつですが、新型インフルエンザ・ワクチンを受ける10歳未満の子供と、はじめて季節性インフルエンザ・ワクチンを受ける9歳未満の子供は、それぞれ4週間あけて2回ずつ受ける必要があります。

なお、インフルエンザのワクチンを受けた後、インフルエンザにかかったと言う人がいますが、これには2通り考えられます：

1. ワクチンを受けてから免疫が確立するのに2週間かかるが、その前にかかった。
2. ワクチンの有効率は、70-80%なので、すべてのインフルエンザを防げるわけではない。

特にインフルエンザの注射型ワクチンは、ウイルスが死んでいるので、ワクチン自体からインフルエンザにかかることはありません。接種後、微熱や筋肉痛が1-2日続くことはありますが、これは体による免疫反応であり、インフルエンザではありません。点鼻型ワクチンの場合、生ワクチンなので、実際のインフルエンザにかかる可能性は、ゼロではありませんが、非常に低いです。

実際インフルエンザらしきものにかかってしまった場合、どうすればよいでしょうか？まずは、症状が、本当にインフルエンザによるものか、他の感染症によるものか、鑑別が必要です。インフルエンザに見られる発熱、悪寒、頭痛、咽頭痛などの症状は、通常の風邪にも見られますし、髄膜炎のような重篤感染症にも見られます。まずは、かかりつけ医に電話で相談し、自宅で様子を見るか、診療所で診てもらいか、検討してもらいます。まず電話で相談する理由は、診療所によっては、他の患者への感染のリスクが高いと判断した場合、特別の診察室を使ったり、あらかじめ患者にマスクをかぶってもらったりなどの処置を行うためです。なお、ミシガン大学では、医師以外のスタッフが電話で重症度を検討できるプロトコールが、各診療所に行き渡っており、軽症であれば、診療所に来る必要はなく、自宅で様子を見る可能性も大いにあります。

では、医師にインフルエンザの可能性が高いと判断された場合、どのような処置が施されるのでしょうか？患者からしてみれば、これが季節性インフルエンザなのか、新型インフルエンザなのか、気になるころでしょうが、確定診断のための検査は、行われない可能性の方が高いです。これは、検査キットの数に限りがあるためで、CDCも医師の臨床的判断に重点を置いています。

それでは、インフルエンザと診断されたら、タミフルなど、抗ウイルス剤は必要でしょうか？CDCは、表2に示す患者の場合、積極的な使用をすすめています。

表2：抗ウイルス剤が適応となるインフルエンザ患者

- 妊娠中及び産後2週間以内の女性
- 年齢65歳以上
- 年齢2歳未満（2歳以上4歳未満も重症になるリスクあり）
- 心臓や肺の慢性疾患（例：心不全、喘息）や免疫機能低下（例：糖尿病、HIV）
- 19歳未満でアスピリン常用者
- 重篤な症状を呈する人
- 入院患者

それ以外の人に関しては、積極的な推奨はないものの、発症48時間以内なら、効用はあります。要は、薬の効果と副作用のバランスを考える必要があり、軽症の場合、使う必要がない場合も多いため、医師とよく相談することをおすすめします。